

マンハッタンにおけるテロ対策警備状況について ～ボストン爆弾テロ事件を受けて～

ニューヨーク事務所

「ボストンで大きな爆発があったらしい」という第一報を耳にしたのは、私がニューヨーク(NY)事務所に赴任してからまもなく2週間が経とうとする、2013年4月15日(月)昼過ぎ(アメリカ東部時間)のことでした。

第一報を外先で聞いたため、その時点では、この爆発がテロなのかそれとも単なる事故なのかという判断が私にはつきませんでした。

しかしながら、帰宅後、テレビのニュースを見ると、どの番組でも今回の爆発はテロ行為であるとの前提で報道されており、その中で、「ニューヨーク市のマイケル・ブルームバーグ市長が、市内の警戒レベルを引き上げ、ニューヨーク市警(NYPD)のテロ対策班を出動させた」とも報じられていました。

翌日、私はNY市内におけるテロ対策警備の状況を自分の目で視察するべく、カメラを片手にマンハッタン中を巡回することにしました。今回は、その視察結果について報告します。

1 マンハッタンにおける警備の状況

(1) ポートオーソリティ・バスターミナル(PABT)

PABTは、「The Port Authority of New York and New Jersey」によって運営されているバスターミナルであり、2012年には約6,500万人が利用するなど、世界最大級のバスターミナルです。

また、タイムズ・スクエアのわずか1ブロック西側というロケーションから、マンハッタンと各主要都市を結ぶ長距離バスの玄関口という面も担っています。

私も、通勤客の一人として、毎朝ニュージャージー州の自宅からPABTまでバスを利用していますが、平日の朝は人でごった返しています。日本でいう、ラッシュ時の新宿駅のようです。

爆破事件の翌朝、いつもどおりPABTでバスを降りたところ、案の定、多数のNYPDの警察官が警備に従事している姿を確認することができました。



PATB で警戒にあたる NYPD 警察官

その中で、3名の警察官と1匹の警察犬が、荷物検査用の台を設置しながら、バスに乗車

しようとする人の荷物を点検している様子が伺えました。私が警察官の一人に写真を撮っていいかと質問したところ、警戒中であることを理由に残念ながら拒否されてしまったことが、印象的でした。

(2) タイムズ・スクエア

タイムズ・スクエアは、「世界の交差点」という呼び名のとおり、世界中から多数の観光客が集まる場所です。私も通勤時にこの交差点を通過することがありますが、金曜日の夜などは人で溢れ返っており、思うように歩けないことがしばしばあります。

また、周囲にはブロードウェイ・ミュージカルのシアターや有名ブランドの店舗が建ち並び、建物の外壁も有名企業の巨大な広告ディスプレイ、ネオンサイン、電光掲示板といった電飾類に覆われていて、とても華やかな印象を受けます。日本で例えると新宿の歌舞伎町がイメージに近いかもしれません。

そうした多くの人が集まり、かつ華やかな場所であるということは、裏を返せばテロの対象になりやすいということです。

実際、2010年5月1日には、パキスタン系アメリカ人による自動車爆弾を使用した爆弾テロ未遂事件が発生しています。

爆破事件の翌日ということもあり、タイムズ・スクエアではさぞかし厳重な警備態勢が敷かれているであろうと思い周囲を視察したのですが、警戒の状況は普段の2割増といった程度で、大きな変化を感じませんでした。

しかしながら、ここで誤解しないで頂きたいのは、NYPDが、決してテロ対策においてタイムズ・スクエアを重要視していないのではないということです。



タイムズ・スクエアにおける警戒状況

NYPDは、タイムズ・スクエアがテロリストにとって格好の標的となり得るということをよく承知しており、それ故に、以前から最大限の警戒態勢を敷いているのです。

つまり、私が警備態勢について大きな変化を感じなかったのは、そういった背景によるものであって、タイムズ・スクエアがテロ対策警備上の要所の一つであることは、間違いありません。

(3) グラウンド・ゼロ

グラウンド・ゼロという言葉は、英語で「爆心地」を意味しますが、2001年9月11日に発生したアメリカ同時多発テロ事件以降は、ワールド・トレードセンターの跡地を示す言

葉として定着しています。現在、倒壊したツインタワービルが立っていた跡地には、巨大な人口の滝をモチーフとしたプール（テロにより亡くなった方々の名前が刻まれている）がそれぞれに建設されており、「9/11 メモリアル」という名のもとに一般公開されています。

私が同所に赴いたところ、特に閉鎖されている様子もなく、多数の観光客が 9/11 メモリアルを訪れていましたが、その周囲には自動小銃を持つ NYPD 警察官の姿が数多く見られ、前述の 2 か所とはやや異なり、厳戒態勢が敷かれている印象を受けました。



自動小銃を片手に 9/11 メモリアルの周辺において警戒にあたる NYPD 警察官

2 世界中で最もテロの標的となりやすい都市は「NY市」

ご存知のとおり、通常、テロ行為にはテロリストの思想的な主張が含まれています。したがって、誰かが人気のない山奥で爆弾を爆発させたとしても、それをテロと呼ぶことはできません。なぜならば、テロリストにとって、自己の思想的な主張を多くの人々に発信するためには、犯した行為がより多くのマスコミに取り上げられ、そのマスコミを通じてさらに多くの人々に発信される必要があるからです。そのため、テロリストは、より多くの人が集う大都市において、より多くの人を殺傷することを企図するのです。

偶然にも、私は、爆破事件の 5 日前、NYPD の本部庁舎においてある幹部から話を聞く機会がありました。その席で、その幹部から「残念ながら、全世界の都市の中で、NY 市が最もテロの標的として狙われやすいというデータがある」という話を聞いたばかりでした。

NY 市、とりわけ世界各国から多くの人々が訪れるマンハッタンの現状とテロの性質を鑑みれば、そのデータに異を唱える者はいないでしょう。

3 対テロに対する NY 市民の意識

NY 市の安全を守ることを使命とする NYPD の警察官が、強い危機感を持って昼夜テロ対策警備にあたっていることは当然ですが、そうした危機感は、NY 市内で生活する一般の人々にも強く浸透していると感じられます。

その象徴的な例の一つとして、NYPD が P A B T や地下鉄の駅などに貼り出している右のポスターが挙げられると思われます。

私がこのポスターを見て大変驚いたのは、NYPD がこれだけの監視カメラを設置していることではなく、警察がこうした監視をしていることを、警察側から市民に知らせた上で「We're using our eyes. Please use yours. (我々は見えています。あなたたちも自分の目で見て下さい。)」と呼びかけていることでした。

仮に、日本の警察が同様のポスターを掲示したら、どうなるでしょうか。おそらく、テロ対策の話以前に、「警察は市民を監視しているのか!」、「市民の安全を守るのは警察の仕事だろう。それを、市民に向かって自分の目を使えとは怠慢だ!」などといった批判が飛び交うことになるのではないのでしょうか。

もちろん、ここNY市においても、警察官の職務執行について批判がないわけではありません。しかしながら、警察がこうしたポスターを市内に堂々と貼り出すことができる背景には、NY市民のテロに対する危機意識の高さと、自分のことは自分で守るというアメリカ国民の自己防衛意識の高さがあることは、間違いのないでしょう。

4 所感

世界中をテロの脅威に陥れた2001年9月11日当時、私は警視庁の機動隊に所属していましたが、その日を境に、「対国際テロ」という危機意識を持ちながら警戒にあたるように厳しく指導をされてきました。

その経験を踏まえながら、今回のマンハッタンの警戒態勢を分析すると、所持している武器の性能はさておき、警察官の警備態勢に限れば日本も大差ないと言えます。

しかしながら、テロに対する市民一人一人の危機意識や、官民一体となったテロ対策への取組みについては、日本とは大きな違いがあると感じました。これまでに幾多のテロ被害を受けているNY市民にとって、テロは対岸の火事ではないのです。

このことは、皮肉にもボストンの爆破事件の被疑者が「(ボストンの後は、)タイムズ・スクエアへ向かうつもりであった」と供述していることから、裏付けられています。

幸いにも、私は、テロ対策の最先端都市であるNY市において、2年間勤務する機会を得



「Stay Alert. (油断は禁物) Be Aware. (用心しなさい) Speak Up. (大声を出して)」というキャッチコピーは、NYPDの広告には必ず記載されている



市内では警察官のみならず、警戒に従事する米兵の姿も

ることができました。NY市民としての危機感を自分にも植えつけながら、テロ対策の実態にかかると多くの情報を吸収し、少しでも日本に持ち帰りたいと思った次第です。

(松重所長補佐 警視庁派遣)

